

日本心理学会第89回大会企画シンポジウム

論文投稿への道2025
—初めての投稿・初めての査読—

尺度開発・統計分析・実践研究 の査読ポイント

2025年9月6日(土)

石井 秀宗

名古屋大学大学院教育発達科学研究科

- **投稿者**は、自身がその研究を行っている
- **査読者**は、その研究にまったく関わっていない

- **投稿者**は、論文に書いたことだけでなく、論文に書かなかったこともよく理解している
- **査読者**は、論文に書かれていることの理解に労力を要し、論文に書かれていないことは知るよしもない

- **投稿者**は、何度もその論文を読んでいる
- **査読者**は、初めてその論文を読む

- 投稿者は, 説明が不足していても分かる
- 査読者は, 説明が不足していたら分からない

- 投稿者は, 論理の飛躍があっても理解できる
- 査読者は, 論理の飛躍があったら理解できない

- 投稿者と査読者では, 論文に対する情報量が大きく異なる

- 査読コメントでは, 説明不足や論理の飛躍, 矛盾点等がよく指摘される

- 説明不足, 論理の飛躍, 矛盾が無いように書く
 - 書くべきことは端折らずしっかり書く
 - 無理に短くまとめない
 - 一方で, 無駄なことは書かない
- 文章間, 段落間の関係が分かるように書く
 - 文章間, 段落間の関係が分かりにくいと, 論理性が低いと判断される
 - とくに問題と目的, 考察の部分は注意
- 既に分かっていることと, 自分が考えたことの区別が, 読者に分かるように書く
 - 先行研究の説明の終点で文献引用するなどして, 既に分かっていることの記述がどこまでかを明確にする
 - 先行研究の説明と自分が考えたことを, 1つの文にまとめない

- 考察は結果に基づいて書く
 - 当該論文の目的を逸脱しない
 - 結果に直接関係する範囲で書く
 - 結果から離れた考察は想像
 - 論文ではなく作文
- 相手は初めて読むことを意識し、伝わるように書く
 - 論文は書いて終わりではなく、読まれてなんぼのもの
 - 書き上げてすぐに投稿するのではなく、間を置いて読み返す
 - 声に出して読んでみる
 - 誰かに読んでもらい、よく推敲してから投稿する

- 指摘箇所だけでなく、関連箇所をすべて修正する
 - 文体や表現など、指摘内容は論文全体に及ぶが、査読者は数箇所を例示するだけのことが多い
 - 関連する箇所を自分で探す（投稿者の責任）
 - 例示された箇所だけでなく、論文全体を自発的に修正する
 - それができてないとテキトーに対応していると見なされる
- 査読者からの質問や、査読コメントに誤解があるときは、意図を丁寧に説明し、論文を修正する
 - 査読者が分からないなら、読者も分からない
 - 意図が査読者に伝わるように、コメントへの返答で丁寧に説明する
 - できる限り論文にも修正を加え、意図がより適切に伝わるようにする

- 問題点, 修正すべき箇所が投稿者に伝わるように書く
 - 説明が足りなければ理解できないのは相手も同じ
 - 対応を求める程度が投稿者に分かるようにする
 - 修正を必須とする
 - 修正が望ましい
 - 必ずしも修正を求めない（参考意見）
- どのような問題があるかが投稿者に伝わるように書く
 - 不十分：何が不十分であるかを指摘し加筆を求める
 - 不適切：何が適切でないかを伝え修正を求める
 - 誤り：何が間違っているかを指摘する
 - 矛盾：何が矛盾しているかを説明する
 - 瑕疵：どのような瑕疵があるかを説明する

- 対等な関係にあると自覚してコメントを書く
 - 投稿者は指導学生ではない
 - 自分が言われて気分を害するような書き方をしない
 - 「～ではない(の)でしょうか？」のような疑問形式で修正を要求しない
 - 「さもありがたみ」など主観的な価値判断を伴う表現を避ける
- 査読コメントへの投稿者の対応が不十分と思ったときはその理由を考える
 - 自分はどのような点を不十分と考えているかを明確にする
 - 査読コメントが意図を適切に伝えていなかった
 - 投稿者の対応で最低ラインはクリアしている
 - 過度の要求だった
 - 不十分な点が投稿者に伝わるよう建設的な再コメントをする

• 2回目の査読までで採否の方向性を決める

- 当初論文では記述が十分でないために理解できないこともあるので、よほどでなければ初回は再査読以上にする
- 編集委員会に対し、不採択に近い再査読などと付記するのは可
- 2回目の査読では、あと少しの修正で採択に至るかを考える

• 無い物ねだりをしない

- 正論かもしれないが現実的には無理難題な要求
- 1つの論文のキャパシティを超える要求
- 掲載最低ラインを大きく超える要求

• 自分の趣味や興味による要求をしない

- 当該論文の目的を逸脱する要求
- 有用ではあるが必要不可欠でない要求

• その尺度を開発する意義は何か

- その尺度を開発しなければならない適切な根拠を示す
- 既存の尺度ではダメな理由を合理的に説明する

• どのような手続きで進めているか

- 測定したい概念について，理論的検討を十分に行う
- 類似概念との違いが明確に分かるように，概念の定義を書く
- 「探索的 (いきあたりばったり)」ではなく，理論に基づいて項目を収集・作成する
- 最終的には半分程度になると考え，十分な数の項目を作成する
- 専門家による検討だけでなく，予備調査を行い項目を精錬する
- 翻訳の場合，バックトランスレーションを行い項目の精緻化を図る

- 許容できる程度以上の信頼性・妥当性が確保されているか
 - 確保されていなければ，査読付論文のレベルにない
 - 複数の方法（多くの場合，内的整合性と再現性）で信頼性を検証することが適切な場合，それを行っているか
- 尺度の構成は適切か
 - 適切な集団，適切な方法を用いて分析されているか
 - 誤差間相関を仮定してモデルの適合度を水増ししていないか
 - 因子間相関が強すぎないか
 - 項目数が不十分な因子はないか
 - 因子の解釈が恣意的になっていないか
 - 因子分析の結果が理論と一致しているか
 - とくに一致しない場合，因子の解釈に対する理論的検討が十分なされているか

- 妥当性の検証は適切か
 - 多数の証拠を集めているか
 - 結果の解釈は合理的か
 - とくに理論と一致しない結果の場合
- 尺度Aの妥当性の根拠としてAとBの関係を確認する一方、応用研究でそのAとBの関係を検討していないか
 - 尺度Aの妥当性検証で前提としていることを、尺度Aを用いた応用研究で検証するのは、論理的に矛盾

• 標本は適切に抽出されているか

- 量的研究に限らず，想定している母集団に対して適切な標本を抽出する
- 1つの学校や1つの地区では，代表性が低いと見なされやすい
- 予備実験・予備調査をせず，いきなり本実験・大規模調査をしても失敗する

• 標本サイズを設計しているか

- とくに国際誌では，標本サイズの設計についての記述を求められる
- 研究計画時に標本サイズを設計することはほぼ必須
- 標本サイズの設計をしていない場合は，検定力分析の結果，信頼区間，効果量等を報告し，標本サイズの適切性を示す

• 分析モデルは適切か

- 独立変数・従属変数の設定が，研究目的や仮説と合致していること
- パスの向きを反対にしても（したほうが），論が成り立つことが多い
- 投稿者が設定したモデルの適切性を，読者が納得できるように，論理的に説明する必要がある

• 因子分析は適切か

- 因子の構造に仮説があるなら確認的因子分析を行う
- 集団ごとに因子分析を行う必要はないか考える
- 因子間相関が強すぎる下位因子はまとめる
 - 再現性が低い
 - 「専門家」が考えるほど分離したものでない
 - どの下位因子を用いても，似たような結果しか得られない

- 都合のよい結果だけに目を向けていないか
 - 研究仮説を支持しない結果への言及を避け，支持する結果だけを取り上げて論を進めるのはダメ
 - 仮説を支持しない結果が得られた理由を考える
 - それが新たな考察，次の研究に繋がる
- 相関係数，パス係数，回帰係数の解釈は適切か
 - 必ず相関係数の値を確認する
 - 相関係数は正なのに，パス係数は負になることもある
 - パス係数・回帰係数は，他の変数を統制した値であることを忘れない
 - 統計的に有意でも，係数の大きさが小さかったら，関連はないと考える
 - 一時点の調査研究だけでは因果は言えない

- p値だけで議論していないか

- 標本サイズが大きいだけで統計的に有意になることは周知の事実
- $r=0.1$ で相関なしと判断されるべきところ, $p<.0001$ だから「有意な相関あり」と解釈するのは誤り
- p値 (の小ささ) で議論しない

- 効果の大きさに注目して議論しているか

- 平均値差, 比率, 相関係数, パス係数など, 効果の大きさを表す指標の値や信頼区間を必ず見る
- 検定結果は有意でも, 効果の大きさが小さければ, 実質的な効果はないと解釈する
- 有意になっているのは標本サイズが大きいため, 大標本で効果の大きさが小さかったら, それが現実

- 実践内容の説明に必要な情報は揃っているか
 - 実践の手続きや流れを読者が把握できるようにする
 - 評定や評価などを行った場合はその基準を示す
- 単なる実践報告になっていないか
 - 貴重な実践・事例でも、経過報告だけでは論文にならない
 - 実践に対する分析を行い、学術的示唆が得られることが必要
- 結論ありきになっていないか
 - 対照実践がない場合、そのことを意識する
 - 他の可能性を排除できないにもかかわらず、当該実践による効果だと強く主張することは避ける
 - 新奇性, 非日常, 時間経過, 別の要因, 偶然など, 他の可能性はいくつも考えられる

- 理論的な検討が十分なされているか
 - 国際文献も含め、先行研究のレビューをしっかりと行う
 - 引用文献が日本語ばかりではダメ
 - 実践が基づいている理論の説明をする
- 過度の一般化・矮小化をしていないか
 - 実践参加者の属性や実践の内容を踏まえ、どのような集団や、どのような状況に、結果を適用可能かを考える
 - 大学生の特徴を成人の特徴と主張（過度の一般化）
 - 成人一般の特徴を成人男性の特徴と主張（過度の矮小化）
- 当該領域の研究に貢献する示唆があるか
 - 実践の良さを主張するだけでは示唆があるとは見なされない
 - 既存の知見にどのような示唆を加えているかを明確にする